

# 『美術年鑑』とロマン派文学

笠原順路（明星大学教授）

---

キーツ (John Keats) の研究家で『美術年鑑』(*Annals of the Fine Arts*) の名を知らない者はいないはずだ。「ナイティンゲールに寄せるオード」(“Ode to the (*sic.*) Nightingale”) と「ギリシア古瓶に」(“On a Grecian Urn”) という、キーツの最も著名なオード<sup>(1)</sup>が最初に掲載された雑誌だからだ。

キーツとこの雑誌の関係については、すでにイアン・ジャックの『キーツと美術の鏡』<sup>(2)</sup>という古典的名著があって、私も今回この「解説」を執筆するにあたって、まずこの本を読み直してみた。そしてその後で『美術年鑑』のページをめくってみて、一方でイアン・ジャックの精緻で明晰な論述に感心しながらも、また一方でその説明が必ずしも実物を同じ縮尺で綴ったものではないという点が少々気になった(無論イアン・ジャックにそうしなければならない義務もないのだが)。

一言でいって、実物ははるかに政治的色彩が濃い、ということだ。その政治性とは、ジョージ・アラン・ケイト (George Allan Cate) の解説でおおむね間違っていない。<sup>(3)</sup>つまり、第一にエルギン・マーブルの推奨運動、第二に歴史画復権の運動である。厳密に計算したわけではないが、総ページ数の優に2割を超えるページがこの二つの主張に何らかの点で関係した記事によって占められている、と言ってさしつかえない。本稿では、上記イアン・ジャックとジョージ・アラン・ケイトの論を踏まえながらも、彼らの指摘していない点を多数おりませ、私なりの『美術年鑑』の解説を試み、さらに、本誌が今後のキーツ研究にとって如何なる展望を開きうるかを述べてみたい。

\* \* \*

トルコ駐在の英国公使、第七代エルギン卿トマス・ブルース (Thomas Bruce, 7th Earl of Elgin) が、アテネ (当時はトルコ領) にあるパルテノン神殿の装飾彫刻を持ち帰った、または、略奪した

---

ことについて、近年その是非をめぐる論議が再燃しているのは、改めて言うまでもないことだろう。<sup>(4)</sup>『美術年鑑』の第一の使命は、時の英国政府がエルギン・マーブルを購入し、それを美術教育に活用させるよう関係各方面に働きかけることにあった。イアン・ジャックも引用しているところだが、重要な点なので重複を恐れずに記せば、第1・第3巻の内扉の献辞にはこうある――

To the Select Committee of the Honourable the House of Commons, Who by Duly Estimating the Value and Recommending the Purchase of the Elgin Marbles to the British Legislature, Have Created an Epoch in the History of their Country; This First Volume of Annals of the Fine Arts, Is Respectfully and Gratefully Inscribed.

To the Right Honourable Thomas, Earl of Elgin, &c. &c. &c. in Respect and Admiration of his Energy and Perseverance in Rescuing the Splendid Remains of Grecian Genius from the Hands of Barbarians; This Volume is Respectfully Dedicated by his Obedient Servant, James Elmes, Editor.

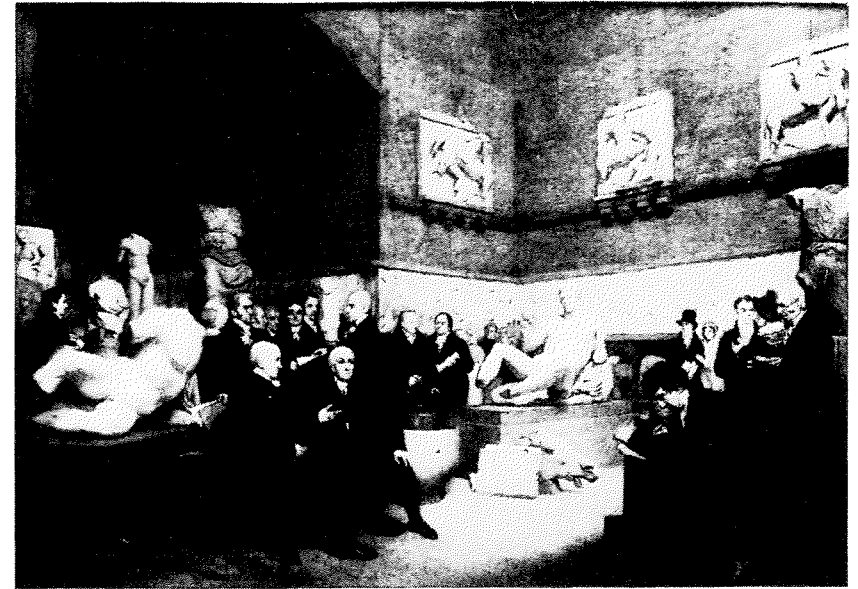
このエルギン・マーブル関係の記事で面白いのは、何とんでも下院特別委員会および上下両院本会議における美術界関係者の発言の要旨が載っていて、当時の美術界最大の関心事がさまざまな文化史的観点から論じられている点だろう。因みにエルギン・マーブル賛成派の主な顔触れは、当のエルギン卿、ジョン・フラックスマン (John Flaxman)、トマス・ロレンス (Thomas Lawrence)、ベンジャミン・ウェスト (Benjamin West) ら、反対派はリチャード・ペイン・ナイト (Richard Payne Knight) である。キーツの二編のソネット「ヘイドンへ、エルギン・マーブルを見て書いたソネット

TO THE  
RIGHT HONOURABLE  
THOMAS, EARL OF ELGIN,  
&c. &c. &c.  
IN RESPECT AND ADMIRATION  
OF HIS  
ENERGY\* AND PERSEVERANCE  
IN  
RESCUING THE SPLENDID REMAINS  
OF  
GRECIAN GENIUS  
FROM THE  
HANDS OF BARBARIANS;  
THIS  
VOLUME IS RESPECTFULLY DEDICATED  
BY  
HIS OBEDIENT SERVANT,  
JAMES ELMES,  
EDITOR.

\* In the last Edinburgh Review, Lord Elgin is praised for having rescued the Marbles from destruction!! This is indeed a triumph for Lord Elgin and the Government. Time has at last wrung this acknowledgement from the iron obstinacy of the Opposition:— and yet had their voice been listened to, what would have become of the Elgin Marbles? ED.

“ There are more things in heaven and earth, Horatio,  
Than are dreamt of in your philosophy.” SHAKESPEARE.

『美術年鑑』第3巻の内扉



アーチャー (A. Archer) 作「エルギン・マーブル仮展示室」  
 (“Temporary Elgin Room”)、大英博物館所蔵

を添えて」 (“To Haydon. With a Sonnet written on seeing the Elgin Marbles”) と 「エルギン・マーブルを見て」 (“On seeing the Elgin Marbles”) が第8号 (第3巻所収<sup>(5)</sup>) に作者の実名入りで掲載されたのもこうした文脈を考えてみる必要があるだろう。<sup>(6)</sup>

その文脈とは、しかし、所謂エルギン・マーブルだけの文脈ではない。『美術年鑑』のページをめくっていると、第二第三のエルギン・マーブルの存在にも気づき、古代志向、考古趣味、廃墟趣味などのない混ぜになった当時の空気——これを要するにロマン派的雰囲気——というものが感ぜられてくるのだ。一例を挙げよう。ヘレニズムの復興に貢献のあったジェイムズ・ステュアート (James Stuart) とニコラス・リヴェット (Nicholas Revett) の共著『アテネの古代遺跡』 (*The Antiquities of Athens*, 4 vols., 1762-1808) の出版で知

られるディレッタント協会 (The Society of Dilettanti) は、最終巻の出た1808年以後も積極的な活動をしていたということが第10号所収の「ディレッタント協会、イオニア調査委員会報告」(“Report of Ionian Committee of the Society of Dilettanti”) という記事によってわかるし、第10・11号連続掲載の「メムノン像頭部とおぼしき巨大石片、アフリカより大英博物館へ到着」(“Arrival of a Colossal Head, said to be of Memnon...from Africa, at The British Museum”) という記事を読めば、これがシェリー (Percy Bysshe Shelley) のソネット「オジマンディアス」(“Ozymandias”) の契機となった出来事だということが分かる。また、考古学協会 (The Society of Antiquaries) 会員で、ワーズワス (William Wordsworth) が初めてワイ河岸を訪れたのと同じ頃に、ティンタン僧院 (Tintern Abbey) をはじめとするウェールズの遺跡を考古学的・美術的に調査したりチャード・コルト・ホーア (Richard Colt Hoare) が、実は、『美術年鑑』への常連投稿者で、第4号の巻頭論文「英国美術学会理事の言動について」(“On the Conduct of the Directors of the British Institution...”) で時の美術界の動向批判をしたのをはじめ計六編の論文等に健筆をふるったということを知ると、これまで私の知っていたロマン派地図の間隙がまた一つ埋められたような気になる。

\* \* \*

1768年に設立された王立美術院 (Royal Academy of Arts) の初代院長は、英国が生んだ最大の肖像画家ともいうべきジョシュア・レノルズ (Joshua Reynolds)。そしてその没した1792年、二代院長の座についたのが、当時レノルズとは反対に歴史画や宗教画で名を挙げているベンジャミン・ウェスト (Benjamin West) であった。『美術年鑑』は、ウェストの主張する歴史画路線を擁護する雑誌でもある。第3巻「前書き」から抜粋してみよう――



ヘイドン作「イエルサレムに凱旋入城するキリスト」、オハイオ州アテーネー美術館 (The Athenaeum of Ohio) 所蔵。イエスを取り巻く群衆のなかにキーツ、ワーズワス、ハズリット、ニュートン、ヴォルテールらの顔が見える。

We conceive the Royal Academy gives an undue preponderance to portrait painting: — we conceive historical painting ought to be the great object of the nation, the government and the sovereign....

この歴史画の復権という大義の主張に真っ向から取り組んだのが、キーツと親交の深かったベンジャミン・ロバート・ヘイドン (Benjamin Robert Haydon) や批評家・随筆家ウィリアム・ハズリット (William Hazlitt) である。彼らは、当時、急速に肖像画へと傾斜を強めてい



『美術年鑑』主筆ジェームズ・エルムズ、王立英国建築家協会 (The Royal Institute of British Architects) 所蔵

く王立美術院への批判、および王立美術院に対抗し歴史画を擁護する英国美術学会 (The British Institution) 支持、の筆を執った。例えばハズリットは、第10号の巻頭論文「ジョシュア・レノルズ卿の性格について」(“On the Character of Sir Joshua Reynolds”)<sup>(7)</sup>で辛辣なレノルズ批判を展開しているし、ヘイドンは、第2・第3号において、王立美術院批判がもとで同院より追放されたジェームズ・バリー (James Barry) なる画家を弁護する一文を、その初出掲載誌『イグザミナー』(*The Examiner*) より転載している。このジェームズ・バリー自身は1806年に没しているのだが、『美術年鑑』ではその後第5・第6・第7号と、「バリーの幽霊」からの投稿が続き、王立美術院批判が展開されることになる。(ヘイドンとハズリットの投稿数の多さは本誌中、五指にはいる。<sup>(8)</sup>)

こうしたなか、歴史画復権運動の支柱ベンジャミン・ウェスト院

長が1820年に81歳の生涯を閉じる。選挙により選ばれた第三代院長トマス・ロレンス (Thomas Lawrence) は、肖像画の名手であった。このことが、『美術年鑑』の廃刊とどのような関係にあるのか、誌上では明確に述べられてはいない。ただ、同誌は、第16号でウェスト院長の葬儀の模様を詳しく報じると同時に同氏の回想録を載せ、トマス・ロレンスの王立美術院第三代院長就任を簡潔に記し、最終号の第17号で、まだ生存中のヘイドンの回想録<sup>(9)</sup>およびヘイドン会心の宗教画「イエルサレムに凱旋入城するキリスト」(“Christ’s Triumphal Entry into Jerusalem”)<sup>(10)</sup>を讃えるラテン語の詩とその英訳を末尾に掲載した。同誌の主筆、建築家ジェームズ・エルムズ (James Elmes) は、1820年刊行の第16・第17号をまとめた第5巻の「前書き」に次のように書いた――

We have therefore resolved on closing the Annals with this Number, having accomplished, in a great measure, the objects for which we first established it.

この言葉が果たして額面通りに受けとれるものかどうか、私は知らない。ただ、最終巻第5巻の内扉献辞を見ると、そこには去り行く敗者が捨てるに捨て切れない一縷の期待が込められているように思えてならない――

To the Royal Academy of London, in Respect for its Recent Symptoms of Improvement, and in Hopes of its Continued Reformation, till It be Restored to the Original Intention of its August Founder, George the Third, Namely, the Cultivation of Historical Painting: This Last Volume of Annals of the Fine Arts is Inscribed with Sincerity, by its Obedient Servant, James Elmes, Editor.

\* \* \*

初期のキーツは、リー・ハント (Leigh Hunt) 及びそのサークルと深く関係していたが、1816年の秋にヘイドンと会ってから、徐々にヘイドンのサークルにひかれていく、というのが従来のキーツ研究の定説である。が、近年、キーツの非国教会的社会背景を強調した伝記や作品解釈が多く見られるようになってきた。つまり、ハント対ヘイドンという大雑把な分類をするなら、ハント的立場からのキーツ研究である。アンドルー・モーション (Andrew Motion) の伝記やニコラス・ロー (Nicholas Roe) の仕事もこの線上に位置づけることができよう。<sup>(11)</sup>と、ここまで書けば勤のよい読者はもうお分かりだろう。今後のキーツ研究の方向として欠くことのできないのが、ヘイドンらの社会背景を視野にいたした研究で、『美術年鑑』はその際の貴重な一次資料となるはずである。

しかし、それにもまして重要なことがある。こうして『美術年鑑』を通読してみると、どうも私には、キーツ後半における叙事詩的試みとその挫折——つまり『ハイピリアン』(*Hyperion*) と『ハイピリアンの没落』(*The Fall of Hyperion*) という新たなる神話創造への挑戦とその中断——が、『美術年鑑』が掲げた歴史画の復権という大義と1820年の廃刊という事実と、妙に重なって見えてきてならないのである。

『美術年鑑』は、25歳で逝ったキーツの実人生と同様、その名を水に書かれた美術誌だったのかもしれない。

#### 注

(1) 最も知られている題名 “Ode to a Nightingale” と “Ode on a Grecian Urn” はいずれも *Lamia, Isabella, The Eve of St. Agnes, and Other Poems* (1820) での題名。

(2) Jack, Ian. *Keats and the Mirror of Art*. Oxford: At the Clarendon Pr.,

1967.

(3) George Allan Cate, “Annals of the Fine Arts” in Alvin Sullivan, ed., *British Literary Magazines*, Vol. II (Westpoint, Ct.: Greenwood Pr. 1983), pp. 7-12.

(4) 例えば次の各書を参照——

St. Clair, William. *Lord Elgin and the Marbles*. Oxford Univ. Pr., 1967; 3rd rev. ed., 1998.

Vrettos, Theodore. *The Elgin Affair: The Abduction of Antiquity's Greatest Treasures and the Passions It Aroused*. Little Brown & Co., 1997.

Hitchens, Christopher, et al. *The Elgin Marbles: Should They Be Returned to Greece?* Verso Books, 1998.

なお、近年は政治的公正を期して「バルテノン・マーブル」という呼称も一部では用いられているが、本稿では『美術年鑑』の解説という性格に鑑み、当時の呼称「エルギン・マーブル」を用いることとする。

(5) ジョージ・アラン・ケイトが第2巻と述べているのは誤り。同氏はさらに、本誌には索引がないと述べているが、これも誤りで、立派な索引が各巻末についている。

(6) 最近の研究に Grant F. Scott, “Beautiful Ruins: The Elgin Marbles Sonnet in its Historical and Generic Contexts”, *Keats-Shelley Journal*, Vol. 39 (1990), pp. 123-50 がある。なお、“Nightingale” と “Grecian Urn” の方には作者の実名記載がない。私見では、この事実は “Nightingale” と “Grecian Urn” を論ずる場合、重要な意味を持ってくるように思える。

(7) 初出は『チャンピオン』(*The Champion*) 1814年、10月30日、11月6日号。無署名記事である。一方、『美術年鑑』では署名がある。ハウ (P. P. Howe) 編のハズリット全集を見ても、初出掲載誌の記載はあるが、その後その記事がどの雑誌に載ったかの記載はない。いわゆる著作権が確立していなかった当時、一つの記事が世にでてから、どのような雑誌に採られていったか、そしてその際どのように形を変えていったかを調べるのも、面白いテーマかもしれない。

(8) 因みに『ブリタニカ百科事典』(*Encyclopaedia Britannica*) 第4・5巻の補遺第1巻 (1816) の「美術」(Fine Arts) という項目はハズリットの筆による。

(9) 本誌の慣例では、毎号、著名な物故者の伝記が載ることになっているが、その欄にヘイドンの回想録がある。

(10) 宗教画とは、言うまでもなく、肖像画と対立するところの叙事的絵画であって、広い意味で『美術年鑑』の主張する歴史画の範疇にはいる。

(11) Motion, Andrew. *Keats*. London: Faber and Faber, 1997.

Roe, Nicholas, ed. *Keats and History*. Cambridge Univ. Pr., 1995.

Roe, Nicholas. *Keats and the Culture of Dissent*. Oxford: Clarendon Pr., 1997.

平成11 (1999) 年 8 月記す

**ANNALS OF THE FINE ARTS 解説**

---

1999年10月10日 発行

発行所：株式会社 本の友社

HON-NO-TOMOSHA Publishers

〒160-0023 東京都新宿区西新宿3-9-6

Nishi-Shinjuku 3-9-6, Shinjuku-ku

160-0023 Tokyo, JAPAN

TEL (03) 5388-9400 FAX (03) 5388-9407